

あの人の信仰があなたを救った

奨励	早瀬 和人〔はやせ・かずと〕
奨励者紹介	日本キリスト教団能勢口教会牧師

数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、四人の男が中風の人を運んで来た。しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったで、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれ考えた。「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆のしている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない!」と言って、神を賛美した。

(マルコによる福音書 2章1―12節)

四人の男たちの信仰によって

チャペル・アワーの依頼のお手紙を読んでいて、秋学期テーマが「互いに重荷を担いなさい」であることを知りました。我が家には、発達障がいを抱えるがために、学校生活、そして家での生活に生きにくさを感じてしまい、しんどい日々を送っている子どもがいます。そんな我が子と共に生きていますと、秋学期テーマの聖句「互いに重荷を担いなさい」は、「ホンマやな〜。世の中全体にこの御言葉がしみ込んでいたら、障がいのあるなしに関係なく、皆どんなにか楽に安心して生きてゆけることか・・・」などと、しみじみ感じる今日このごろであります。そこで今日は、この聖句に加えマルコによる福音書からの物語と合わせてお話ししていくことといたします。

読んでいただいたマルコの物語。病気で苦しむ一人の人を、四人の男たちが担架に乗せてイエスさまのところに連れていく話です。「正面玄関は人だかりでとてもやない、中に入られへんで。どないしよう」。そこでこの四人は、屋根をバリバリはがし、穴を開け、病人をつり降ろしたというのです。

- 私はこの物語がとても気に入っています。ここに登場する何人も的人物に自分を重ねて読んでみると、さまざまなことに気づかされます。皆さんも一度、試してみてください。
- ・たとえば、イエスさまが話をされている家に集まる群衆の一人かもしれない。
 - ・たとえば、そこに連れて来られた病人かもしれない。
 - ・たとえば、病人を運んだ四人の仲間の一人で登場しているかも。
 - ・たとえば、この光景を見て、心の中でイエス様のことを批判する律法学者の一人かもしれない。
 - ・あるいは、物語の最後に出てくる、驚いて神を賛美する者たちの一人だってことも考えられる。
- さあ皆さんはどうでしょうか。

いずれにしてもこの物語は、礼拝が行われているただ中に、その会堂の屋根をはがされて人がつり降ろされてくる、そんなびっくり仰天する事件が起こったようなものなのです。ある意味でその行為自体は、非常識な行為だったかもしれない。でもそれ以上に驚かされるのは、実はイエスさまの言葉ではないでしょうか。

「イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦される』と言われた」（5節）。ところで、こんなことはないでしょうか。

「ああ、なんて自分は中途半端な信仰しかもってへんのやろう。きっとこんなんじや、神に救われへんやろなあ」あるいは「あんな不信仰な人間、ありや救われへんで」などと思ってしまう。そのような心をもってしまふことって、結構あるのではないのでしょうか。そこには、自分がどれほどの信仰をもっているかを問題にしている姿があるからだと思います。

でもこの物語のイエスさまは、担架に乗せられた病人の信仰がどんなだったかは全く問うていません。むしろ仲間たちの信仰の方を問題にされたのです。同じ個所を釜ヶ崎でお働きの神父、本田哲郎さんは「この人たちの信頼にみちたふるまいを見て」と訳しました（『小さくされた人々のための福音』より）。信仰という言葉には「信頼／真実」という意味もあるので、「この人たちの信頼にみちたふるまい」と、本田神父は訳されたわけですが、要するにイエスさまは、病人を支えた男たちの友情、その真実な姿を評価されて「あんた、救われるよ」と言われたに違いありません。

恐らく病人そして四人の男たちは、当時のユダヤ教の教えにどっぷり浸かっていて、「こんな病気になったんは、何らかの罪を犯してしまったからやろなあ。だとして仕方ないことや」と思っていたかもしれません。でも四人の男たちは、この病人の「早く治りたい」あるいは「イエスさまのお話を一度でいいから聴いてみたい」そんな願いを聞き入れ、彼を理解することによって、居ても立ってもいられない気持ちの方が勝り、イエスさまの元へと何としてでもお連れしなさんと、あの突拍子もない行動をとったのです。それをご覧になったイエスさまは随分と感激され、病人に向かって「あなたはもう大丈夫や。社会から張られたレッテルなんて気にせんていい。さあ起き上がって、安心して生きてゆきなさい」と言われた。ここには、イエスさまの救いの宣言が力強く響いているではありませんか。

聖書には「あなたの信仰があなたを救った」という言葉もありますが、それとは違って「仲間の信仰があなたを救った」というパターンもあり、面白いと思いませんか。

「僕は〇〇が苦手です」

唐突ですが「生きる力とは何か」と問うてみます。

新聞や雑誌なんかの人生相談の欄などに著名人が、「生きる力とは〇〇だ」と答えているようなカッコいい言葉を私はもっていません。でも以前に、大阪にある不登校経験者や発達障がいの生徒を受け入れているある私立高校でボランティアをしていたときのことを思い出しました。「人間関係トレーニング」という授業を担当する先生が生徒に語っていた言葉、これがとても印象的でした。

「生きる力というのは、自分がどれだけ強くなれるかでもなく、どれだけ忍耐強い人間になれるかでもなく、どれだけ自立した生活力を身につけられるかといったことでもなく、むしろ弱くたっていい、そんな自分に理解を示し分かってくれて、必要な助けをしてくれる人を探すこと。そういう人を周りに置けるかどうか、それが『生きる力』となってゆくんだよ」確かそんな言葉を語っておられたのです。

国語の文章題とか感想文を書くのが大の苦手。人が話したことをメモしたり要約するのも苦手。そんなわが子です。「僕は先生がゆーたことすぐ忘れちゃう。『今から言うこと、メモしなさい』って言われても、うまいこと書けへん。せやから忘れ物も多いし、約束も守られへんのやわ・・・」と落ち込んでしまいます。そんな彼があるとき、コーディネーターの先生から「担任や教科の先生にも話しておくけど、君も『僕は〇〇が苦手です』と話してみたら?『できないことをできない』ということは、恥ずかしくて勇気がいって難しいことだけど、でもそれが言えると何かが変わると思うよ」そんなアドバイスをしてくれた、と喜んでいました。

重荷を担いあいながら

聖書の話に戻ります。一人の病人が四人の仲間の助けによって、イエスさまからの救いを得ることができました。

誰かに助けられ、誰かに理解され、誰かに愛される。そしてそこに、イエス・キリストからの憐れみが注がれていることに気づかされていく。

またその反対に、誰かを理解し、誰かを助け、その誰かのことをキリストが憐れんでおられる姿を見つめながら、その人を、そしてキリストを愛していく。

この連鎖が繰り返し続けられることが、豊かな人間関係を築いていくことにつながるのではないのでしょうか。

どうか、同志社大学に連なるお一人おひとりが、自分の弱さを、そして他者の弱さを知り、互いに理解しあい、互いの抱える重荷を少しでも担うことができ、助け・助けられることを経験しながら、共に生きるための優しい社会を作るにはどうあつたらいいのだろうと考え、歩んでゆけますよう願っています。

あの人の信仰（信頼にみちたふるまい）があなたを救い、またあなたの信仰（信頼にみちたふるまい）があの人を救うのです。